

離島における先進的ヘルスケアサービスの提供の実際に関する実施調査  
～島根県海士町、米子市に所在するコミュニティの調査を事例として～

- ・参加期間:2023年5月18日～2023年5月20日
- ・開催形式:現地での対面開催

【活動の概要】

本研究では島根県海士町、米子市に所在するコミュニティのフィールドワーク等を通じて、島根県海士町における先進的ヘルスケアシステムの構築と、コミュニティの強みを活用したヘルスケアサービスの取り組み事例を学ぶことである。地域医療や地域のコミュニティ作りに関わる施設や組織を訪問し、フィールドワークによる観察と関係者へのインタビューを行った。

【活動の成果】

1. 産前産後ケアハウスはぐはぐ

「産前産後ケアハウスはぐはぐ」は、助産師が運営する「ラウンジ併設通所型産後ケア施設」であり、地域における母親の居場所的な役割を果たしていると考えられた。利用者の属性としては、そもそも鳥取県西部地域で出産できる地域は米子市のみであり、産後ケアを受けることができる施設も限られているため、様々な地域から母親が集まっていた。そして、コミュニティを活用した事例として、例えばお子さんの年齢が近い母親たちが集まる「月齢会」など様々なイベントを開催したり、パンの販売なども行っていた。そうした拠点を通う中で母親同士のつながりが生まれたり、友人の関係性になる人々もいるという。地域コミュニティの希薄化が進む現代社会において、このような取り組みは非常に重要であると感じられた。一方で、支援を必要としている母親にどのようにリーチしていくかということは、運営している助産師の方も課題感として持たれているようであった。こちらの施設では、インスタグラムなどを用いた情報発信も行っており、そうしたSNSやホームページの情報を獲得して施設にたどり着く方もいるという。しかし、やはり施設にたどり着くルートとしては、保健師からの紹介等が多いようであり、各々の保健師の裁量や市町村の情報発信の方法によって待遇が異なってしまうのが現状である。特に妊産婦の場合では、母子手帳交付の際に様々な支援の情報を得る機会があるが、現実味が生まれるのは出産後である。そうすると産後2ヶ月は、出産後の育児により支援に関する手続きをすることが難しいため、気づいた頃には手遅れになってしまうという現状もあるようだ。このことより、コミュニティが人々の健康・ウェルビーイングにおいて非常に重要であることを実感するとともに、どのように人々をコミュニティに巻き込んでいくかということに関しては未だ課題が山積していることが考えられた。

## 2. 保健師さんへのインタビュー

今回お話を伺った保健師の方は、1981年に新卒として、海士町の保健師に就任された方である。その中で印象的であったこととして、島民の健康に対する意識の高さである。当時、保健師の取り組みとして、住民に対する糖尿病教室から行ったのだという。そうするうちに住民の健康リテラシーが上がっていき、住民同士で「糖尿なの？検査値は？」などと聞き合う会話なども生まれるようになったという。そうした島民同士の繋がりが健康意識の上昇に大きく関わっているのだらうと感じられた。海士町における診療所は一箇所のみであり、社会資源に恵まれているとは言えないが、地域コミュニティの存在がそうした環境を補っているのではないかと考えさせられた。このことにより、住民の健康・ウェルビーイングを考えるにあたり、専門家の支援のみならず、住民同士の繋がりとといったインフォーマルな資源というものも重要であるのだということに気が付くことができた。

### 【今後の活用】

本フィールドワークでは、地域医療や地域のコミュニティ作りに関わる施設や組織を訪問し、海士町独自のヘルスケアに関連する取り組みの実際を網羅的に知ることができた。海士町は離島であり医療的にも人的にもリソースが限られている一方で、日頃から顔の見える住民関係が築けている点や昔から島民の健康意識が高いことなど、その地域の特性に合致した仕組みづくりが長期に渡ってできていることが分かった。地域特性や住民特性に合わせた仕組みづくりが重要と考えられるので、今後は、海士町以外の地域でヘルスケアに関する取り組みを行う場合や、特定の健康課題に焦点を当てた場合について検討し、修士論文で更なる研究を進めていく。

### 【謝辞】

本研究にあたりご協力をいただきました海士町関係者の皆さまに心から感謝申し上げます。また、日々指導をいただいている指導教員の宮川祥子先生、多大なご支援をいただきましたSFC学会の皆さまに深く感謝申し上げます。